Society5.0 と 界面社会科学

北本 仁孝

たしか私が高校のときであろうか、漢文で荘子の話として、次のようなことを学んだ。ある男（荘子）が夢の中で蝶になって楽しく飛び回ったが、夢が覚めた自分が現実なのか、夢の中の蝶が自身の姿なのか、という話であった。この哲学的な意味はいろいろと解釈されるとして、今このような状況が私たちの間近に迫っているように思う。

先日閣議決定された未来投資戦略の中で実現を目指している Society5.0（超スマート社会ともいわれている）の姿として、総合科学技術・イノベーション会議では「必要なもの・サービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細やかに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といった様々な制約を乗り越え、生き活きと快適に暮らすことのできる社会」とのイメージが示されている。そこでは、仮想現実であるサイバー空間と私たちが存在する現実空間とが融合されつつある、というより、サイバー空間が現実空間を侵食しつつあるとも思える。蝶が舞う（たぶん）仮想空間と、私たちが存在する現実の物質空間との界面はどのようなものであろうか。電気化学は界面を扱う学問であると私は認識しているが、この新しい社会の界面はどのように定義できるものであろうか。

その2つの空間をつなぎ、界面を構成しているものがセンサとアクチュエータであるとも説明されている。サイバー空間は情報が存在する空間で仮想的なモノやコトも存在するが、それを直接手に触れることはできない。一方、現実空間は私たちが生物学的触覚でさまざまなモノやコトと相互作用できる空間である。センサを介してサイバー空間の仮想的なモノやコトに現実空間の私たちが触れることができ、アクチュエータを介して現実空間からサイバー空間のモノやコトを操作することができるといった考えである。

このような現実の物質に基づいた考えのほかに、そのような状況では我々人間のアイデンティティは果たしてどこに存在すると感じるのであろうか。つまり、荘子のいうところの蝶と人間のどちらが本当の姿かというのと同じ考えである。このような人間のアイデンティティを考える機会はますます増えると予想される。また、これからの社会では上述の総合科学技術・イノベーション会議のいうところのダイバーシティ（多様性）を越えて、各々がアイデンティティと幸せを感じることを目指している。そこには人と人、人と機械など多様な界面が存在する。この多様性界面を認識する機会が増えてくる。さらに、人と人とは、ネットワークの進展によってサイバー空間の中で界面を超えて、ますますつながりを求める状況がある一方で、ネット社会でのアイデンティティが傷つけられ、現実社会での存在が失われることも起こっている。このような多様性のある複雑な界面、先述のサイバー空間と現実空間の界面など社会の在り方を左右する界面を考える社会科学、いわば界面社会科学も電気化学会の重要なテーマになるのかもしれない。

Yoshitaka KITAMOTO
ナノ・マイクロファブリケーション研究会 主査
東京工業大学
物質理工学院 教授